

永井秀尚著「修羅の巨鯨伊東祐親」

馬場駿

小説は、源頼朝に捕らえられ七女小室の夫、佐原義連の許に幽閉されて死を待つ祐親の「最期の夜」から始まり、終章「暗殺」で再び同じ場面に戻る。この間の二章から十五章まではすべて祐親の回想である。

この形、脚本の方ではマズルカ方式と呼ぶ。しかし歴史小説でこの形を徹底するには覚悟がいる。歴史小説は通常視点を天におき、すべての登場人物の目と耳を通して物語を展開していく。何代にも亘る大河ドラマが可能になる所以である。作者はこの創作上の自由を捨て、あえて主人公祐親が見聞きしたこと以外語れないという一人称小説を選択した。

しかも、祐親死後の後日譚まで祐親の魂魄を使い、それを貫いている。読み手はいつしか、祐親と一心同体になり、彼が直面する様々な危機の場に共に臨み、彼の決断を支持し或いは批判している自分に気付くに違いない。そこで初めて作者の「笑顔」に出会うのである。

平治の乱で平軍に破れた源軍の関東の豪族を追討から守り、平穩裡に降伏させた祐親は、諸豪族の感謝と平清盛はじめ平氏一族の信頼を一身に受け、交易を盛んにする商才と軍略を併せ持つ豪の者として、伊豆を中心に一時代を築く。小説は祐親自らの語りでこの経緯を詳らかにする。成功例は「回顧録」の性質上自慢めくが、これも「塞翁が馬」で後の蹉跌の遠因になっていて、この作品の奥深さを感じさせる。名前だけ知っていて祐親をよく知らない人は、彼の活躍の記述を追うだけでも目を見張るはずである。

この小説の楽しみ方は多岐に亘る。祐親と中央権力の関係。清盛の人となり。に惚れた祐親は「片想いの主従関係」と知りつつ平家の衰亡に殉ずる。叔父の茂光、祐継はじめ一族の覇権争い、国守、権守という虚ろな権力とのせめぎ合いに祐親は頑ななまでに信念を貫き、潜在的な敵を創出していく。かつて山岡荘八の「徳川家康」が経営者必読の書と宣伝されたことがある。同様の言い方をすれば、この小説は実力では絶対負けないと常日頃自負している中間管理職の必読書である。祐親の姿勢は教師にも反面教師にもなり、役立つこと受け合いである。

伊東を愛し伊豆を育てた祐親は、天の味方さえあれば武家の頭領にもなれたであろう。その無念と人間伊東祐親を本書の中に見る。

